第58回
タレントゥム／イタリア
Tarentum／Italy

ピュロスの勝利

リクルート=スタディサプリ講師　村山 秀太郎

すべての道はローマに通ず

16歳での欧州23日間一人旅から半世紀近く、“人生ずっと仮住まい”を気取って世界を旅してきた私が、最も多く(20回以上30回未満)訪れたのは、イタリアとスペインだ。「ローマに行く」という人から“お薦め”を聞かれて、いの一番に挙げるのは「カタコンベ(地下の共同墓地)群を見ながら、アッピア街道を歩いてローマに向かう1～2時間の散歩道」である。

2千年前に使徒パウロも歩いたアッピア街道が建設されたのは紀元前312年。この道が、前272年のギリシア人の都市タレントゥム攻略で完成する、都市国家ローマのイタリア半島統一への道が開き、「すべての道はローマに通ず」と言われた。この時ローマは多くの奴隷を獲得したが、その中にリウィウス・アンドロニクスがいた。ギリシア語にもラテン語にも長けた彼は、解放された後に学校を建て、ホメロスの『オデュッセイア』をラテン語に訳したものを教科書とした。



アッピア街道
(Wikimedia Commons)



長期的には「敗北」につながる勝利

前280～275年、古代ギリシアの都市国家エペイロス王のピュロスはタレントゥムからの支援要請を受けてローマと戦った。ヘラクレアの戦いとアスクルムの戦いでローマ軍を破ったもののピュロス軍も精鋭兵や指揮官を大量に失う。一方のローマは人口・兵力・同盟網を背景に、このアッピア街道を使って軍を補充できた。いくら負けても講和に応じないローマに対し、勝利を喧伝(けんでん)した部下を、ピュロス王は「もう一度ローマからこのような勝利を得れば、われわれは破滅する」とたしなめたという。これが「ピュロスの勝利」だ。最終的にピュロス王はイタリアから撤退し、ローマがタレントゥムを占領した。そしてこれは、「犠牲が大き過ぎて、事実上負けに等しい割に合わない勝利」の呼称となった。

戦場で敵に損害を与えることと、自国民・自民族にとって望ましい政治的結果を実現することは別問題なのである。